

私立大学研究ブランディング事業 2018年度の進捗状況

学校法人番号	261015	学校法人名	京都精華大学		
大学名	京都精華大学				
事業名	持続可能な社会に向けた伝統文化の「表現」研究				
申請タイプ	タイプB	支援期間	2018	年度～	2020 年度
参画組織	創造戦略機構(伝統産業イノベーションセンター、高大接続センターほか) 全学研究機構(国際マンガ研究センター、社会連携センターほか) 芸術学部、デザイン学部、マンガ学部、ポピュラーカルチャー学部、人文学部 芸術研究科、デザイン研究科、マンガ研究科、人文学研究科				
事業概要	「表現の大学」を将来ビジョンの基軸とする本学が蓄積してきた「表現」研究の実績を活かし、国内外の協定機関と伝統文化を3つの視点【A:マテリアル B:コミュニティ C:ヒューマン】から共同研究する。期待される成果は、伝統文化のイノベーションに資するデータベースの構築と、伝統文化を活用した未来創出モデルの開発である。これを普及させ、「文化と芸術の力によって世界の未来を創造する表現の大学」というブランドを確立する。				
①事業目的	<p>本事業では、世界的に持続可能な社会が求められる現代において「人間」と「表現」の存在を復権すべく、これまでの研究実績に基づき、海外の協定機関等との共同研究を展開する。これを通じ、人類社会が持続するための未来創出モデルを提示し、「文化と芸術の力によって世界の未来を創造する表現の大学」というブランドを国内外に普及させることを目的とする。</p> <p>本学では2016年度と2018年度に「ダイバーシティ推進宣言」を公表し、「ダイバーシティ」を「多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合い、対等に機会が開かれること」と定義した。ここに示すように、本事業で意図する「人間」とは、年齢や性別、国家や宗教、人種や民族などを超えた、多様な存在を含意している。そして「表現」とは、「自己の思想、考えをかたちにして他者へ投げかけることによって、自己と他者に変革をもたらす未来を創造する行為」を意味するものである。</p>				
②2018年度の実施目標及び実施計画	<p>【実施目標】 共同研究機関を含めた研究体制の組織編成、特別共同研究員会議の開催。共同研究のインフラと情報発信基盤としてのデータベースの設計、開発準備。研究の発足にあわせた、マテリアル研究、ヒューマン研究に関する情報発信、および特設WEBサイト構築など情報発信環境の整備を行う。</p> <p>【実施計画】 マテリアル研究では「魚革」の最適な染色方法の検討、漆精製法の分類・整理と「天然塗料の使用状況」に関する聞き取り調査を行う。ヒューマン研究では、「台湾における藍染め文化」をテーマに現地でのフィールド調査、伝統産業を題材とした教育プログラムの受講生動態などの基礎情報のとりまとめを行う。また、データ仕様およびデータベース仕様の検討を行い、データベースの構築を行う。</p> <p>あわせて、情報発信環境の整備と内外へのブランディング事業発足の情報発信を実施する。具体的には特設WEBサイトの公開、ブランドブックの制作、SNSアカウントの設定など情報発信環境を構築する。情報発信手法として、プレスリリース、創立記念式典における発表、公開講座の開催、展示会の開催、シンポジウム・研究会の開催、広報誌「木野通信」などの手段を組み合わせて、ブランディング事業発足を周知する。</p>				
③2018年度の事業成果	<p>特別共同研究員会議を開催し、共同研究のインフラと情報発信基盤としてのデータベースの設計、開発準備を行った。マテリアル研究では実践をとおして「魚革」の最適な染織方法を模索しており、漆生成法に関しても、諸所での聞き取り調査が進んでいる。ヒューマン研究においても台湾で開催された国際会議で研究発表を行うなど研究は順調に進んでいる。データベースについても情報の整理とインフラ整備に着手している。</p> <p>2018年度には創立50周年記念式典、石黒宗麿の木葉天目茶碗の発見・展覧会「石黒宗麿と八瀬陶窯-五〇年目の窯出し-」の開催、私立大学研究ブランディング事業の選定に関するものの計4回のプレスリリースを行い、計8回メディア掲載された。創立50周年記念WEBサイトが開設され、記念事業の案内、レポートが滞りなく公開されている、特に、創立50周年記念式典では約400名の招待者が出席し、伝統文化の「表現」研究について発表を行った。</p> <p>公開講座「手仕事の学校」を計6回開催し、計120人が来場した。その他にも京都商工会議所の依頼に応え、京都の伝統産業関係者向けの講座を開催した。</p> <p>授業科目「京都の伝統産業演習」では学生が伝統産業の工房に体験演習に参加し、その制作物を展示した「2018年度『京都の伝統産業実習』報告展」を学内のギャラリーフロールで開催し、302人が来場した。本学が管理している八瀬陶窯から人間国宝・石黒宗麿の木葉天目茶碗が発見されたことをきっかけに特別展示会「京都精華大学50周年記念『石黒宗麿と八瀬陶窯-五〇年目の窯出し-』」を開催し、584人が来場した。</p> <p>その他にも、保護者向けの講座や同窓会向けの発表、大学広報誌「木野通信」の発行などを行った。</p>				

<p>④2018年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)</p> <p>1.進捗状況について 2019年2月に選定が確定したことから、計画の一部に遅れが生じた。広報媒体の制作等、本事業において広く活用される資料については優先順位をあげて取り組む必要がある。</p> <p>2.学内外への研究の波及効果について 研究代表者会議で研究者の初会合を行なった。伝統産業イノベーションセンターおよび京都精華大学の方針・ビジョンを共有し、本事業とそれぞれの活動における連動性を模索し、内容の確認を行なった。 マテリアル研究「モデルA-1:ファッション業界における持続可能な原材料」では「魚革」の染織について、アイランドの職人による試作品と京都の職人による試作品が制作され、商品化の実現性を高める方向にある。この研究については特に国内の複数企業から引き合いがあり、波及効果も高まっている。</p> <p>3.伝統文化の「表現」研究のブランディング浸透について 伝統産業イノベーションセンターの特別ゼミ「工芸部」が第12回 京都・文化ベンチャーコンペティションで京都府知事賞 最優秀賞を受賞し、多くのメディアに取り上げられた。また、人間国宝石黒宗麿の木葉天目茶碗が本学所有の八瀬陶窯から50年ぶりに発見され、学内で展示会を開催したことから多くのメディア取材を受け認知度が上がった。本学の「表現」研究のブランディングが少しづつ浸透した。</p> <p>4.目標達成阻害要因について 伝統文化の表現は、本学のマンガ、デザインをはじめとする表現領域の基礎授業となる位置付けであり、伝統文化に関する科目は全学共通科目として学生も広く履修できる。ただし、全学的な取り組みとしてさらに成果を拡大するためには、前述のような共通科目であるという認識を早急に浸透させ、さらなるブランディングづくりに連携させる必要がある。</p> <p>5.総合評価 全体計画に遅れが生じているものの、人間国宝石黒宗麿の木葉天目茶碗の発見や特別ゼミ「工芸部」が第12回 京都・文化ベンチャーコンペティションで京都府知事賞 最優秀賞を受賞したことなどにより、想定を上回る良い反響を得られることができた。今後は、計画の遅れを取り戻すとともに、学内外の定常的な活動を強化し本事業を力強く推進していく。</p> <p>(外部評価) 研究ブランディング事業への選定の連絡が遅れたことにより、事業計画に遅れが生じているが、今後の活動でうまくカバーしてほしい。 美術館では実績がある展覧会の巡回が多い中で、本事業においては地元にある八瀬陶窯で石黒宗麿作の木葉天目茶碗の発見に際し、地域とのつながりや伝統工芸としての背景にも着目し展覧会を催したことは、ユニークな着眼点である。また、伝統産業実習展についても学生30人が計19社の工房で実習し、その成果を展示することは、地域の伝統文化やその承継プロセスを可視化しているにとらえることができ、非常にユニークである。就業支援にも伝統産業業界を対象とした合同企業説明会を開催するなど、一連の大学の活動が伝統産業の活性化につながると思われる。取材や来場者の指標から社会でも関心と呼んだといえるのではないか。ただし、石黒宗麿氏に関連する広報方法についてはプレスリリースの工夫によってさらに大きな反響を呼ぶことも可能だったと考えられるので今後の課題としてもらいたい。 今後本事業において、「魚革」に関する研究プロジェクトなどとおして、海外とのつながりや交流の中からシナジーを生み出し、新たなイノベーションを起こすことを期待する。</p>
<p>⑤2018年度の補助金の使用状況</p>	<p>2018年は本学が創立50周年を迎えたため、周年事業と本事業を結び付け、記念式典や祝賀会、シンポジウムなどを開催し、付随する媒体としてWEBサイト等を制作した。また、本事業の一環として、「京都の伝統産業実習」や「京都の伝統工芸」講座を開いた。また、数年後の国際会議の準備をはじめとした海外における会合費などに支出した。</p>